The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ひとと出会う哲学 : 開講までの経緯について
Author(s)	三浦, 隆宏
Citation	臨床哲学のメチエ. 2003, 11, p. 4-6
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6660
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ひとと出会う哲学

開講までの経緯について

三浦隆宏

一　きっかけ

たとえば大阪大学と「高大連携」を組む北野高校や、あるいは豊中キャンパス周辺の高校であるならば、話はわかりやすい。だが、なぜ、茨木市の北西部に位置する福井高校で、臨床哲学研究室のメンバーが「哲学」の授業をすることになったのだろうか？関西の地理にくわしい方であれば、このような疑問を持たれても当然であると思う。それゆえ、福井高校と臨床哲学研究室との〈出会い〉について述べることからはじめることにしよう。

きっかけは3年前にさかのぼる。――当時、3年目を迎えていた金曜6目のセミナー「臨床哲学講義・演習」では、過去2年間の共同での議論（そこでは主に、「ケア」や「現場性」という概念についての検討、および看護・教育関係者と大学内部の教官・院生とのあいだでの「ことばのすり合わせ」がおこなわれていた）をへて、より個々の場面に即したかたちでの取り組みをしてゆきたいという気運がメンバーのなかに高まりつつあった。そこでこの年（2000年4月）から、メンバー全員が一堂に会する「全体会」と、いくつかの小グループごとに継続して議論をおこなう「分科会」の、ふたつの会を併用するというプランが採られることになる。（この方式は現在もつづいている。）

そして、この年3つに分かれた分科会のうちの1つが、2002年度からの国実施をまえにして、当時いろいろと注目されることの多かった「総合学習」について考えるグループであった。当時、博士後期課程に在学していた現役の看護婦である武田保江さんのことば（「自分の娘が通っている小学校で実験的におこなわれている『総合学習』という試みにたいしては、親として不安をおぼえる」）を受けて、現在の「教育（改革）」について考えてみようとしたのである。

かし、この取り組みにはひとつの問題点が存在した。武田さんは東京から日帰りで大阪まで学びに来ており、時間の都合上、金曜日の6限目にはなかなかフルタイムで参加することができなかったのである。その結果、私たちは当事者を〈不在〉にしたままで（さらに、参加者にとって

「総合学習」がまったく未経験のものであったことも重なって)、いくつかの資料をもとにいわば当て推量で、議論を進めざるをえなくなった。このように、分科会を進めていくにつれて、いくつかの困難の存在が見えはじめていたときに、堀一人先生（大阪教育大学付属天王寺高校、なお堀先生にかんしては『メチエ』vol.８の10-13頁を参照）から紹介されたのが、大阪府立福井高校であったわけである。

いっぽう、その頃の福井高校はといえば、翌年から「普通科総合選抜制高校」として大きく生まれ変わるのをまえにして、校長先生みずからが先頭に立って、より特色ある高校となるように学校ぜんたいで取り組んでいる最中であった。9/27に福井高校をとつぜん訪ねた鷲田さんと私は思いもよらず大歓迎を受け、とりわけ教頭の岡田先生には「若い院生のみなさんが、生徒と接してくれることに大いに期待しています」とまで言ってもらった。こうして、福井高校と臨床哲学研究室とのつきあいが始まることになったのである。

２．森芳周さんのドリカム授業「マンガからテツガクへ」

翌月の１０月からは私をはじめ研究室のメンバー数人が、福井高校のドリカム授業を見学するようになり、岡田先生には「来年度はじっさいに授業を担当してみませんか」とも誘わ訣

●「難しい顔したオッサンが街角で自分の考えを言っている」そんなイメージだったけど、ちと考えがかわった。誰にでもできることなんだって思った。

●ぼくのイメージでは想像力が豊かな人がするものだと思っていました。マンガが題材だったので少しみじかになりました。

●生きていくうえでの真理、人生の意味、などを言葉にすることだと思っていた。今もそう。

生徒の「哲学」観を尋ねたのは、この頃私たちは岡田先生から「来年度は選択科目のひとつとして、１年間の授業を担当してもらえないか」と誘われており、とりあえず生徒むけのシラバスを作成する必要があったからでもある。生徒には「こういう授業であれば受講したいな、と思う授業ってどんなもの？」と尋ねて、生徒の意見を聴いたうえで、会沢久仁子さんと私がまず素案をつくり、それを研究室のメンバーに見てもらったあと、１０/１５に以下のようなシラバスを福井高校に提出した。

――シラバス――

３．シラバスの意図

「いくら私たちが『こういう授業をやってみたい』と意気込んでいても、生徒に選択してもらえなかったら開講できなくなる。かといって、あまりにも生徒に媚びたものでも…」と、いろいろ逡巡しながら「目的」「学習内容」「年間計画」の言葉をいくどか書き直したものだが、私のなかで授業の意図そのものは揺らぐことがなかった。そのことにかんして、若干の思いを述べておきたい。

話は前後するが、福井高校はことし創立20周年を迎えるいわゆる「若い」高校であり、良くも悪くも「普通の」「平均的な」学生がつどう高校である。一学年約３００人のうち、明確な就職希望者は５０人ぐらいで、残りはいちおう進学を希望し、じっさいに大学・短大へ５０人ぐらいづつ、専門学校へは８０人ていどが進学する。そして、残りの生徒の大半は、いわゆる「フリーター予備軍」となっているのが現状である。私がこの進路状況を知ったときに思ったのが「１７、１８歳の時点で、曲がりなりにも自分の進むべき道を選択せざるをえないというのはつらいものだな」ということであった。私たち臨床哲学研究室の教官・院生に限らず、この『メチエ』を手にとっている多くの大学関係者のみなさんにおいても、高校生の頃は、その延長上に「大学」という存在がはっきりとあって、それゆえ１７、１８歳の頃には、志望校や学部の選択をめぐって頭を多少悩ますことはあっても、〈進学するか、それとも就職するか〉

という選択の岐路に立たされることはあまりなかったのではないだろうか。恥ずかしい話だけれども、私がはじめて自分の進路について（ほんの少しばかり）考えてみたのは、大学４年の夏のことである。高校生活の途上で、自分の将来について考えたことなどまったくといってよいほどなかった。いわば、「先送り」にしていたのである。（そえゆえ、この年になって、いよいよ真剣に考え込まざるをえなくなってもいるのだが…。）

そして、福井高校の生徒たちは中学から高校へと進学する段階で、ある程度「自分というものがどれぐらいのものであるのか」ということを、おぼろげながらにも認識させられている。たとえば、彼／彼女らの口から「将来、弁護士や医者になりたい」という言葉を聞くことは、ほとんどないのではないか。いわゆる、自分の将来というものを早々に「見限っている」側面が彼／彼女らにはあるように、私には思われる。

このような生徒観を私は持っていたので、（1）「臨床哲学研究室であるがゆえに、福井高校に貢献できることとは何か？」を考えたときに、すぐに頭に浮かんだのが、社会人院生をはじめ、毎週のセミナーなどに出席している、多種多様な大人たちの存在であった。臨床哲学の院生のなかには、たとえば、大学の哲学科を出たあと就職し、雑誌の編集長をしていたにもかかわらず、辞職し、また大学に戻ってきた人や、看護・教育の仕事に就きながらも、その〈意味〉を考えたくて研究室にやってきた人など、人生を〈うろうろ〉している人たちがたくさんいる。私はこの人たちに、福井高校の生徒たちに向かって、（2）「人生とは、けっして一直線に進むべきものでもないこと、そしてこれからの君たちには、まだたくさんの選択肢があるということ」をじかに伝えてほしいと思った。そのことで、福井高校の生徒たちには、（3）「学校の〈外〉にいる人びとと〈出会う〉ことをつうじて、それまでは思い描くことのなかった、未知の、そして可能な〈自分〉に出会ってほしい」と思ったのである。つまり、日頃の学校生活では出会うことのない〈他者〉と出会い、彼／彼女らの口から新たな〈世界〉について学び、その結果、これからの〈目指すべき自分〉というものに出会う――これが、私がその頃に描いていた授業の基本理念であった。

私は、個人的にこのような意図をもっていたので、当初「てつがく入門」と題していた講座名が、最終的に「出会いのてつがく」となったのを後になって知ったときは、「これほど、似つかわしい講座名もないな」と思わずほくそ笑んだものである。

もちろん、研究室の他のメンバーのなかには「もっと、生徒に考えさせる内容にしたい。考える喜びを伝えるような授業にしたい」という異論もあるし、また、じっさいの授業内容にしても、私の（個人的な）意図どおりにはならないものが多かった。授業協力者とのより綿密なやりとりを怠ったのはコーディネータの一人（と、私は勝手にこの授業での自分の役割を位置づけていたのだけれども）として、反省すべき点であった。さらにいえば、いわゆるこちらの「持ち駒」をなるべく多く使いたいという欲もあって、１０人の生徒たちをいたずらに混乱させたのも事実である。――「みんな、たしかにめまぐるしい授業だったね。」

ひとと出会う哲学――それは１０人の高校生が、社会の「人びと」と出会うことを意味していたのはもちろんのこと、（臨床）哲学が、いまどきの高校生という「ひと（＝他者）」と出会うことをも意味していたように思う。全２５回の授業で、私たち１７人の大人たちはいったい何を感じたのだろうか？

（みうらたかひろ）